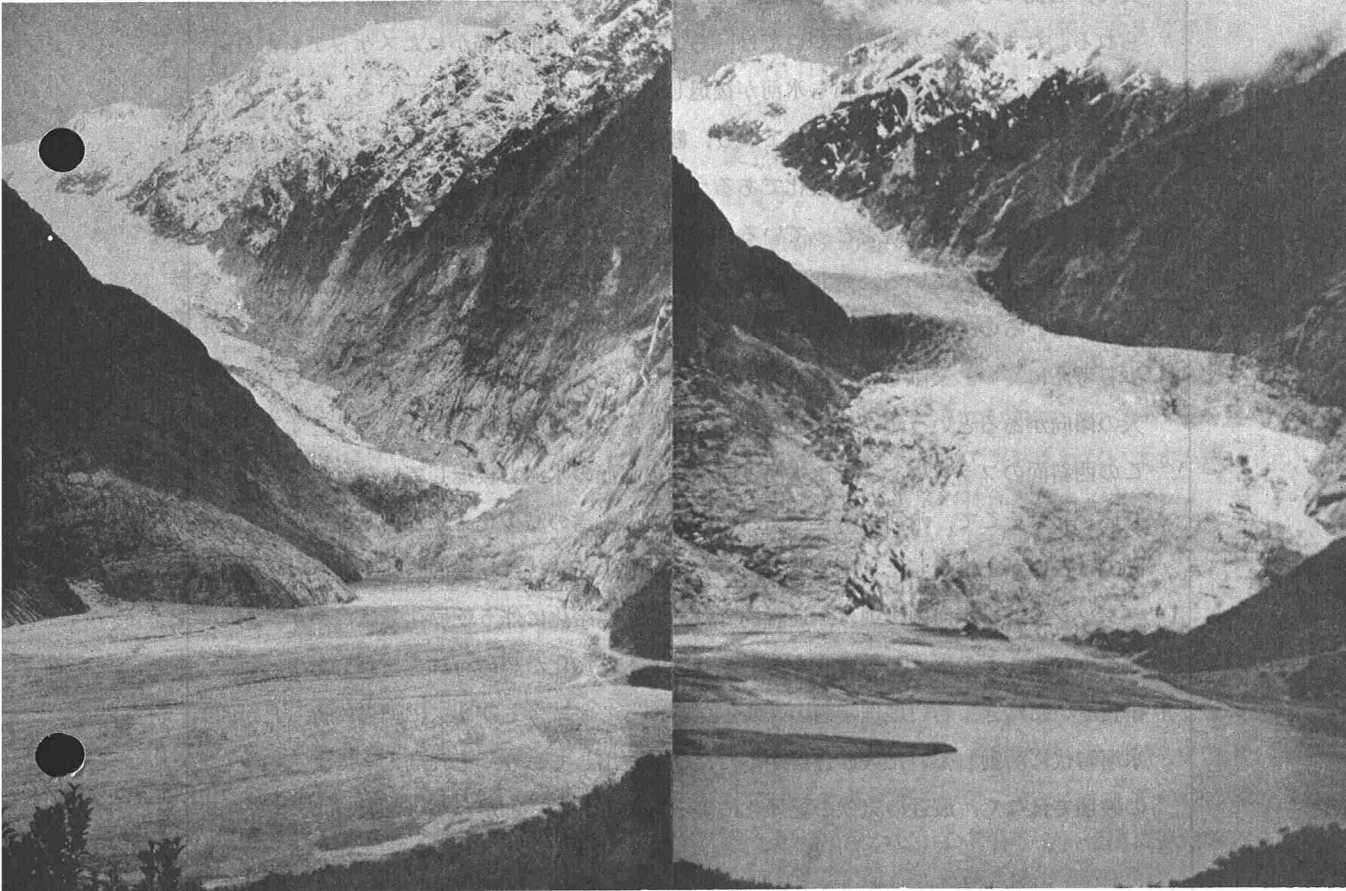


# 報 廣

東京大学理学部



## 目 次

表紙の説明	1
素粒子物理国際センターの発足	小 柴 昌 俊… 2
田園将蕪	吉 田 鎮 男… 3
宇宙はなぜ大きいのか?	佐 藤 勝 彦… 4
〈学部消息〉	6

## 表紙の説明

写真は、ニュージーランド南島のフランツジョフホテルの食堂でもらったメニューの裏・表にあった続き写真である。左側が1972年におけるフランツジョセフ氷河の写真で、右側のものが1947年のものである。たった25年の間に著しい氷河の後退がみられる。たまたまこの氷河については、ちょうど100年前に描かれたスケッチもあり、それによると100年で2000mも氷河が後退したことが明らかになっている。もちろんそれに関する報告もすでに出されており、観測された気温（都市）のデータとも合わせて、この原因は、南半球の暖化であろうという推論が出されており、南半球の気候学者の多くはこの暖化説をとっている。しかしながら、北半球の学者の多くは最近の気候寒冷化を認めている。南北の寒暖の変化は、万年、千年というオーダーでは同調してきているので、百年オーダーだけ反対ということは、不可能ではないにしても、少し考えにくい。文献をいろいろ見ているうちに、東斜面の氷河のあるものは若干拡大の傾向があるという短かい記述に出あった。もし気温の上昇が原因であるとするこの西斜面のフランツジョセフ氷河と同様に東斜面の氷河も後退していなければおかしい。私はそこで、氷河のもとである偏西風による雪の減少化、すなわち乾燥化が原因ではないかと推量した。南半球の多くの土地は氷河時代は乾燥の時代であった。フランツジョセフ氷河の後退は、逆説的ではあるが寒冷化に伴う乾燥化ではないか。もしそうなら、その風上にあるオーストラリアでも乾燥化が認められるはずである。科研費をいただき、若い地理学者のグループを作ってオーストラリアに調査に行ったが、氷河時代に活動していた大砂丘群がふたたび動き出しており、それは人為による植生の破壊ではなく、最近の気候の乾燥化によるものであることがわかった。

地理 鈴木 秀 夫

## 素粒子物理国際センターの発足

小柴昌俊（センター長）

東京大学理学部の特別事業として概算要求を出していた上記国際センターに関し、本年度設置が認められ4月11日に素粒子物理国際センターとして正式に発足いたしました。この機会に理学部広報誌上をお借りして、発足に際し多大な御尽力を頂いた皆様方に深く感謝すると共に本センターの設立の目的等概要についてご紹介したいと思います。

本センターは、スイスのジュネーブ郊外にあるCERN（欧州原子核研究機構）に建設中の超大型電子・陽電子衝突装置、LEP（Large Positron Electron collider）を使用して素粒子の実験的研究を行なうことを目的としています。LEPの重心系最大エネルギーは昭和63年の実験開始時には100 GeV、その後最終的には260 GeVにまで達し、何れの場合も世界最高のエネルギーをもつ電子・陽電子衝突装置となります。これにより、先頃やはりCERNの陽子・反陽子衝突装置で発見された弱い相互作用の媒介粒子 $Z^0$ や $W^\pm$ を直接大量に作り出すことが可能になり、電弱相互作用の統一理論を細部にわたって非常に精度良く検証することができます。また、統一理論の重要な礎石の一つであるヒッグス粒子は一体存在するのか、中性微子の種類が一体何種類あるのか、

クォークやレプトンは本当の究極の素粒子で内部構造を持たないのか、といった様な問題も同時に明らかにされるでしょう。さらに、今まで存在が予測されながら発見されていないトップクォークの探索や我々のまだ夢想だにしなかった新しい現象や新しい素粒子の探索等重要な新発見が期待されます。

この研究の為に本センターはCERNを中心として、カナダ、フランス、西ドイツ、イスラエル、イタリー、イギリス及びアメリカの研究所・大学と共に国際協同実験を組織し、検出器OPAL（Omni-Purpose Apparatus for LEP）を建設し、LEPに設置して実験を行ないます。既に数名の教官がCERNに派遣され、本センターが担当する鉛ガラスチェレンコフカウンターの建設に着手しつつあります。

本センターの前身である素粒子物理学国際協力施設では、やはり西ドイツのドイツ電子シンクロトロン研究所の電子・陽電子衝突装置PETRAを使って国際協同実験を行ない、検出器JADEにより大きな成果を挙げてきました。その時の経験を十分に生かし、CERNでも世界に冠たる研究成果を出していきたいと思っています。

## 田園将蕪

吉田鎮男(地質)

名古屋の街に比べて、東京の街はごみごみときたなく、車が渦巻いて息苦しい。それに合わせるかのように、名大構内に比べ東大構内は散らかり、車があふれている。道路ぎわや側溝にはごみがたまり、用済みの立看は生け垣に立て掛けられたままで木を枯らしてしまっている。雑草が生い茂っている。東京の人々はもう、清潔とか閑静といったものへの感受性を失なってしまったのだろうか。

研究や勉学にとって環境などどうでもよいという、ロボットのように強じんな人もなかにはいるだろうが、一般には良い環境が豊かな人間性をほぐくみ、すぐれた人材を育て、独創的な研究を生むと思われる。環境という肥やしは、20年とか50年といった期間をかけて効いてくるものだろう。昨今の東大生には利己的で思いやりのないが多く、これは偏差値教育のせいではないかといわれている。しかし本性利己的な学生が多いわけではあるまい。問題は、こういう学生を、すさんだ環境で研究してきた教師が、すさんだ環境の中で教育するということである。次代の東大の教師・研究者のことを考えるならば、今手をうつべきであろう。

まず、構内を走る車・駐車する車は厳しく制限

すべきである。教職員の通勤用の車は、原則として50才以上にだけ認める。学生のそれは原則として認めない。業者その他の学外の車は、大学の2~3カ所に立体駐車場を設けて駐車させ(人件費など管理実費程度の駐車料を取る)原則として構内の走行を禁じる。駐車場を作る資金が問題であるが、大学の営繕費を他のいかなるものより優先させて、これに当てることができないものであろうか。これは、研究・教育にとって、現在なものにもまして必要かつ投資価値があるもの一つではないかと思う。

構内の清掃・美化は、もし予算がないのなら、各建物単位くらいで受持を定め、たとえば40才以下の全教職員と全学生で年2回くらい大掃除をやればよいのでないか。

東大は、研究・教育の質において他の多くの大学の目標となるべきであり、また日本の将来への指針を与えるべきである。それには、今の汚く暗い東大を、磨き上げて明るくすることが急務のように思われる。

(昭和58年7月1日、名大・理・地球  
より転任)

毎月1日は

「省エネルギー」

の日です。

## 宇宙はなぜ大きいのか？

佐藤勝彦 (物理)

知的好奇心の強い幼稚園から小学校くらいの子供を持った親は、子供の質問に答えられずに困った経験を何度か持っているにちがいない。多くはたわいもないものであるが、たとえば『そこより遠くはどうなっているの？』とか『それより昔はどうなっていたの？』とかの質問を繰り返してされると、たちまち答に窮することになる。宇宙論などというとずいぶん難かしように聞こえるが結局はこの質問に答える理屈である。宇宙論は言うまでもなく、古代においては神話であったし、現在においても、アインシュタインによる一般相対性理論という強力な科学的武器を持っているにもかかわらず、その大きさや創造については“神話的”である。

さて、ここで読者の皆様に神様になっていただき、現代宇宙創造の神話を作りたいと思う。但し、1度創造した後においては、その進化はアインシュタイン方程式をはじめとする物理法則にまかせていただく。アインシュタイン方程式はテンソル微分方程式で一般的にそれを解く事は至難であるが、宇宙原理、つまり空間は一様且つ等方で特別な場所もなければ特別な方向もないという仮定をすれば、高校生でも解ける常微分方程式——それは宇宙の大きさ  $R(t)$  の時間  $t$  に対する変化を記述する——になってしまう。つまり、神様の役目とは、この微分方程式の初期値を決めていただくというだけのことである。現在の物理法則によってどのくらい膨張宇宙の昔にさかのぼれるかというと、それはだいたいプランク時刻  $t_p = (\hbar G / c^5)^{1/2} \approx 10^{-43}$  秒までと考えられている。ここで  $G$ : 重力定数,  $c$ : 光速,  $\hbar$ : プランク定数である。

この時刻以前では、時空そのものが量子論的效果により大きくゆらぎ、にえくりかえっていると考えられている。

この時刻以前を神代と考えることにすると、神様に決めていただくのはこの時刻での宇宙の密度  $\rho$  である。もしあなたが密度として、ある臨界密度  $\rho_p (\approx 10^{94} \text{ g/cm}^3)$  より大きい値を選んだならば、その宇宙は正の曲率を持った宇宙となり、プランク長さ  $l_p = (\hbar G / C^3)^{1/2} \approx 10^{-33} \text{ cm}$  から出発し最大  $R = l_p / \sqrt{(\rho - \rho_p) / \rho}$  まで膨張し、その後収縮に転じてつぶれてしまう。現在、我々の住んでいる宇宙は観測から少なくとも  $10^{28} \text{ cm}$  より大きいことがわかっているので、神様としては宇宙の最大の大きさを与えるこの式の分母を極めて小さくしなければならぬ。そのためには密度を少なくとも 120 桁の精度で  $\rho_p$  に近くなる様に注意深く選んでいただかねばならぬ。さもなければ、その宇宙は早くつぶれてしまい、とてもその中で人類が生まれることはできない。密度を  $\rho_p$  より小さく選んだ場合は、宇宙は負の曲率をもち一応無限に大きくなることはできる。しかし、現在我々の住んでいる宇宙の様に、曲率が測定できないほど平坦な宇宙を作ろうとすると、やはり 120 桁の精度で  $\rho_p$  に近く選んでいただかねばならぬ。

我々の宇宙を作った神様がどんな神様であったかは知るよしもないが、サイコロをふって宇宙を作る様な神様だったならば、極端にひん曲った宇宙や極端に小さな欠陥宇宙ばかり大量生産し、とても我々の住む様な広大で平坦な宇宙を作ることではできなかったであろう。さて、神様、神様と呼

んできたが、神様の出番をなくするのが物理学なのであるから、できれば初期値をあたえる役目についても神様には引退していただきたいと考えている。

私としてはプランク時刻に存在していた“量子的ゆらぎ”こそアインシュタイン方程式の初期値をあたえるものだと考えたい。しかし量子的ゆらぎと考えることは、まったく“サイコロをふる神様”に宇宙創造をお願いした事と同値であり、とても我々の住むことのできる宇宙を作ってくれそうもないのである。

さて私が述べたことは、要するに数学的に言えば、ある特徴的な長さ（プランク長さ= $10^{-33}$ cm）の次元を持つ微分方程式、アインシュタイン方程式を解き、その長さより60桁も大きい長さ、宇宙の大きさを出すためには、極めて不自然なほど精密に初期値を選ばねがダメで、それは物理的に考えれば難しいという事である。かつてディラックは、宇宙の大きさと素粒子の法則を結びつけると、非常に大きな、意味のある無次元の数が存在し、且つそれは時間的に変化するという説（Large number hypothesis）を出したがその時間変化はともかくとして、その存在を強調した点は意義があったと考えられる。実際アインシュタイン方程式は、素粒子論的に言えば素粒子間に働く重力

相互作用を記述する基本方程式なのであるから、宇宙の大きさを説明するには、それに加えて $10^{60}$ もの無次元の数を導く“物理”が何か必要なのである。この『宇宙はなぜ“プランク長さ”より極端に大きいのか？』という問題は、宇宙論のもっとも根本的な問題の1つであるが、最近量子的ゆらぎの様な“サイコロをふる神様”がアインシュタイン方程式の初期値をあたえても、その作られた宇宙はある時期の間、指数関数的な急激な膨張をおこし（数学的には指数関数により無次元の大きな数が導入され）、ちゃんと我々の住んでいる様な宇宙になるという理論が作られた。これはインフレーション宇宙モデルと呼ばれているが、アインシュタイン方程式と、物質間に働く力を統一する大統一理論を組み合わせた自然な帰結なのである。大統一理論は、その第1ステップである弱电相互作用の統一については、CERNにおけるW、Zボソンの発見により確立したと考えられる。強い力をも統一する大統一理論の検討は、理学部素粒子国際施設を中心とした陽子崩壊の実験として神岡鉱山にて進められている。『宇宙の謎を解く素粒子』というBBCの番組が放送されたことがあるが、まさにそのとおりなのである。陽子崩壊の実験の成功を期待しながら宇宙創造神話は終りとする。

あなたです！

火事を出すのも

防ぐのも

## 《 学部 消息 》

### 教 授 会 メ モ

3月21日(水) 定例教授会

理学部 4号館 1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認  
(2) 人事異動等報告  
(3) 昭和58年度卒業生決定の件  
(4) 研究生の入学について  
(5) 研究生の研究期間延長について  
(6) 昭和59年度文部省公立大学研修員の受入れについて  
(7) 昭和59年度奨励研究員の受入れについて  
(8) 昭和59年度受託研究員の受入れについて  
(9) 昭和59年度民間等との共同研究の受入れについて  
(10) 人事委員会報告  
(11) 会計委員会報告  
(12) 図書委員会報告  
(13) 企画委員会報告  
(14) 素粒子物理国際センター規則(案)について  
(15) 素粒子物理国際センター長候補予定者選出について  
(16) その他

なお、当日田丸教授、岸保教授、竹内教授、鈴木(秀次)教授ならびに花井教授の5教授のご退官にあたり、記念撮影(1号館玄関前)及び送別の会(17時30分より、学生会分館・赤門脇)が行われた。

4月18日(水) 定例教授会

理学部 4号館 1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認  
(2) 人事異動等報告  
(3) 研究生の入学について  
(4) 昭和59年度受託研究員の受入れについて  
(5) 寄附の受入れについて  
(6) 人事委員会報告  
(7) 会計委員会報告  
(8) 教務委員会報告  
(9) 企画委員会報告  
(10) その他

(次回以降予定：

5月16日(水) 13時30分より  
6月20日(水) 同 上  
7月18日(水) 同 上  
8月 休 会

## 教室主任・施設長等名簿

(昭59. 4. 1現在)

教室・施設名等	教室主任・ 施設長等氏名	電話番号	備 考
数 学 教 室	岩 堀 長 慶	4 0 4 1	
情 報 科 学 教 室	米 田 信 夫	4 1 1 5	
物 理 学 教 室	宮 澤 弘 成	4 1 3 3	
天 文 学 教 室	堀 源 一 郎	4 2 5 7	
地 球 物 理 学 教 室	熊 澤 峰 夫	4 3 1 0	
化 学 教 室	高 橋 武 美	4 3 5 6	
生 物 化 学 教 室	酒 井 彦 一	4 3 9 6	
動 物 学 教 室	上 田 一 夫	4 4 3 6	
植 物 学 教 室	古 谷 雅 樹	4 4 6 9	
人 類 学 教 室	埴 原 和 郎	4 4 8 5	
地 質 学 教 室	飯 島 東	4 5 2 2	
鉱 物 学 教 室	床 次 正 安	4 5 4 1	
地 理 学 教 室	鈴 木 秀 夫	4 5 7 2	
臨 海 実 験 所	木 下 清 一 郎	(0468) 81-4105~7	(神奈川県三浦市三崎町)
植 物 園	岩 槻 邦 男	814-0138~9	(東京都文京区白山)
地 球 物 理 研 究 施 設	福 島 直	4 5 8 1	
分 光 化 学 セ ン タ ー	黒 田 晴 雄	4 3 3 1	
中 間 子 科 学 実 験 施 設	山 崎 敏 光	4 2 3 3	
地 殻 化 学 実 験 施 設	飯 山 敏 道	4 5 1 4	(評議員)
素 粒 子 物 理 国 際 セ ン タ ー	小 柴 昌 俊	4 2 3 1	
遺 伝 子 実 験 施 設	飯 野 徹 雄	4 4 6 5	
学 部 長	江 上 信 雄	4 0 0 0	(研究室4441)
評 議 員	有 馬 朗 人	4 1 2 1	
評 議 員	飯 山 敏 道	4 5 1 4	
事 務 長	石 渡 昭 男	4 0 0 1	
事 務 長 補 佐 (総 務 担 当)	神 戸 和 雄	4 0 0 2	
事 務 長 補 佐 (経 理 担 当)	福 井 保 男	4 0 0 4	
庶 務 主 任	蓮 見 公 一	4 0 0 6	
学 務 主 任	三 浦 俊 暁	4 0 0 3	



## 昭和59年3月28日卒業者氏名

### 数 学 科

窪田 稔	小島 寛之	柴田 徹太郎	阿部 輝竹
大橋 博司	佐藤 哲郎	高松 慎悟	旦代 三弥子
中重 亮	花牟礼 幸二	久光 徹	松田 純一
山口 裕康	石垣 哲郎	内田 素夫	小野 薫
亀澤 宏規	川端 浩範	栗原 将人	黒瀬 俊
小藤 俊幸	小林 聡	齋藤 毅	重原 正明
杉本 充	関根 光弘	千葉 雅人	千代延 大造
鶴 光太郎	中山 昇	野中 弘之	花村 昌樹
榛沢 知司	日野 まり	福原 秀輝	堀 洋子
村田 潤子	森吉 仁志	行成 敦	

(39名)

### 情報科学科

市來 宏基	荒野 高志	石井 慎一郎	太田 克弘
香川 正明	鎌田 富久	加茂 純	佐竹 伸夫
佐藤 敏明	佐藤 正明	中山 秀明	縄田 淳一
原 裕貴	森 継修	横田 聡一	渡 秀也

(16名)

### 物 理 学 科

市位 嘉宏	小日向 敏行	大橋 正健	小島 直人
小松 晴子	中山 耕之介	永野 眞一郎	松岡 信也
松塚 忍	松元 隆夫	吉田 篤正	相澤 俊
青木 健一郎	池上 高志	石川 克巳	石橋 延幸
磯田 和良	板垣 利和	一井 信吾	岩野 薫
大井 貴	大槻 東巳	大沼 広明	大野木 哲也
小竹 悟裕	小田原 宏明	片山 泰尚	香取 眞理
川崎 雅裕	岸田 隆	楠木 規央	國場 敦夫
桑原 善太	小西 哲郎	後藤 貴行	坂井 拓哉
重川 直輝	下野 昌人	下村 裕	白井 郁男
白橋 明弘	杉野 修也	鷹合 紳夫	田嶋 直樹
立川 真樹	田 哲也	塚本 俊一	堤 崇弘
常行 真司	堂野 孝弘	中川 賢一	中野 愛一郎
西堀 一弥	服部 利明	花井 亮	林 茂広
原 伸生	藤田 真之	堀内 真人	三木 敬一
宮澤 透	室尾 和	山 岸 秀一	芳山 龍一

劉 勇 渡 邊 聰 (66名)

天文学科

成岡 繁 奥村 幸子 嵯峨 正威 茂山 俊和  
吉岡 諭 吉川 真 (6名)

地球物理学科

小林 良清 堂谷 忠靖 浅川 栄一 安楽 和明  
岩田 直樹 植松 健太郎 大澤 理 大谷 晋一  
小村 健太郎 北島 尚子 小泉 耕 新川 圭二  
仲井 圭二 中島 健介 中村 匡 中村 昇  
中村 るみ 長谷川 洋平 樋口 知之 本間 浩一  
馬 目 薫 (21名)

化学科

坂本 勝 藤岡 秀樹 赤澤 方省 天津 恵美  
五十嵐 未知人 出井 陽治 岩田 耕一 鶴川 彰人  
宇多小路 泉 浦野 妙子 大島 康裕 太田 雅子  
奥出 幸二郎 北島 義典 北野 正史 榭 敏朗  
作田 誠 笹川 信義 佐々木 誠 鈴木 裕史  
武脇 隆彦 田中 敦 田畑 健 田原 太平  
土井 一郎 中嶋 敦 中村 広幸 永井 研治  
長岡 均 新居田 知生 野中 秀彦 橋田 卓  
林 雄二郎 日高 洋 深井 知裕 牧嶋 昭夫  
牧野 哲也 松本 健一 三木 康彰 満田 憲昭  
村瀬 至生 山崎 邦彦 山崎 茂 山本 俊夫  
若尾 哲 亘 紀子 (46名)

生物化学科

神野 茂樹 安達 敦子 荒川 秀雄 顯谷 友子  
池田 純 石丸 弘 伊藤 涉 浦崎 友貴緒  
岡田 明彦 岡田 真幸 河合 剛太 倉持 健太郎  
齋藤 哲一郎 三瓶 巖一 鳥越 智香子 灘野 大太  
松本 理恵子 宗行 英朗 山梨 裕司 渡邊 嘉典  
(20名)

生物学科 (動物学)

石坂 佐知子 梅澤 美香子 小村 潤一郎 塩満 典子  
設樂 宗孝 藤田 敏彦 前田 英作 (7名)

生物学科 (植物学)

河原孝行	北島薫	辻昌美	中村寛夫
橋本明	光澤浩	吉久徹	(7名)

生物学科 (人類学)

池田学	坂田清	田中伊知郎	脇坂仁
渡邊嘉久			(5名)

地学科 (地質学鉱物学)

鈴木昌明	阿久津亨	井上善恵	大石貴子
川本友久	小徳基	杉山正二	砂田貴
高畑伸一	筒井恵子	平松力	福田功一郎
町田大輔			(13名)

地学科 (地理学)

鈴木康弘	阿部一	久世幸郎	芝田裕一
須永和久	高山昌行	山室眞澄	(7名)

合計 253名

昭和59年3月29日大学院修士課程修了者氏名

数 学

銀林純	中野哲夫	宮寄洋一	山内禎祐
安藤哲哉	市川尚志	井上昭彦	大江武
北詰正顕	斎藤昌彦	清水勇二	白柳潔
杉山健一	鈴木将史	高山信毅	寺杣友秀
中村周	松本謙二	松田克己	山村健
			(20名)

情報科学

青野雅樹	太田昌孝	佐藤三久	篠原靖志
西門隆	早貸由起	広瀬紳一	美馬義亮
山上俊彦	横井伸司		(10名)

物 理 学

青木慎也	秋葉康之	朝倉伸幸	伊藤桂
------	------	------	-----

池上 健	岩井 順一	岩崎 雅彦	岩塚 信治
榎田 洋太郎	小形 正男	小野木 敏之	大熊 哲
大竹 暁	大淵 泰司	加藤 政博	柿元 満
片山 龍一	門野 良典	門脇 広明	城所 俊一
儀間 敏昭	薦田 裕由	坂本 健	鈴木 紀雄
鈴木 勝	田崎 晴明	多田 哲也	田中 成典
高橋 忠幸	高橋 直之	竹内 幸子	徳宿 克夫
徳永 万喜洋	富田 章久	内藤 磨	長岡 隆太郎
中畑 雅行	中村 正吾	中村 典雄	中山 隆史
浜口 智志	原 隆	平尾 淳一	福本 康秀
松尾 由賀利	松田 祐司	三尾 典克	三木 健
村谷 博文	森 茂樹	森田 哲也	矢彦沢 茂明
山本 隆夫	吉澤 雅幸	吉住 圭一	

(55名)

### 天 文 学

仙石 新	市川 伸一	鈴木 左絵子	寺沢 信雄
半田 利弘			

(5名)

### 地球物理学

阿部 豊	上野 真司	角田 衛	上垣内 修
佐々木 晶	関田 康雄	高藪 出	土肥 啓介
中村 正人	西木 司	浜谷 雅信	保坂 直紀
眞鍋 輝子	宮田 明	望月 英二	安田 一郎
吉田 真吾			

(17名)

### 化 学

伊藤 賢	伊藤 治彦	石井 昭彦	石井 隆文
石井 仁	今枝 美能留	宇梶 裕	江川 徹
小沢 理	大島 正裕	折田 治夫	鴻巣 俊之
塩沢 一成	柴山 勝弘	新長 えり子	鈴木 孝臣
高津 章子	高橋 和也	高柳 正夫	豊田 和弘
中村 貴義	西大路 宏	橋本 幸彦	林 広樹
藤井 卓司	藤原 昌夫	松本 祐三	宮崎 栄治
宮嶋 俊平	矢ヶ崎 篤	山口 日出	山下 正彦
山田 徹	山田 康洋	米田 成一	

(35名)

### 生 物 化 学

飯野 雄一	石館 周三	大鹿 育緒	太田 安隆
川上 浩一	木山 亮一	儀我 祐子	北島 健

北本年弘	小谷 享	小西 のぼる	齋藤 一 樹
田中良晴	鳥山 優	中井 俊 樹	中西 伸 樹
保川 清	渡辺 達 夫	渡邊 利 雄	(19名)

動物学

鬼塚 信彦	加藤 誠	金森 章	武田 洋 幸
弥益 恭	渡邊 信 元		(6名)

植物学

上田 太郎	大矢 禎 一	神田 穰 太	坂口 修 一
根本 泰行	野村 港 二	村上 哲 明	由良 浩
			(8名)

地質学

大藤 茂	近藤 康 生	塩沢 拓 也	松濤 聡
若宮 俊司			(5名)

鉱物学

安部 良夫	杉山 和 正		(2名)
-------	--------	--	------

地理学

茅根 創	高村 茂		(2名)
------	------	--	------

相關理化学

伊藤 健吾	今井 馨太郎	尾崎 弘 行	岡崎 卓
国井 達夫	黒川 理 樹	佐藤 裕 徳	桜井 力
清水 晶子	関家 一 雄	高橋 和 弘	為ヶ井 強
寺島 浩一	永井 希世文	馬場 芳 美	濱野 洋 子
福田 裕二郎	松本 節 夫	山崎 誠 之	(19名)

科学史・科学基礎論

上西 仁	佐々木 光 俊	九鬼 一 人	齋藤 憲
羽片 俊夫			(5名)

合 計 208名

## 理学博士の学位授与者

〔昭和59年2月20日付（9名）〕

専門課程	氏名	論文題目
論文博士	小林 孝和	脊椎動物骨格筋の局所的な機械的および熱的反応に関する研究
同	奥田 義久	西南日本外帯の大陸縁辺における新生代後期の構造発達史
同	久野 良孝	偏極ミュオン吸収反応 $^{12}\text{C}(\mu^-, \nu\mu)$ $^{12}\text{B}$ における生成核 $^{12}\text{B}$ の平均偏極度の測定
同	矢野 公一	大域的 graph link の support の研究
同	橋本 静代	高密度プラズマ中での水素様イオン線のレッドシフト
地球物理学	瀧上 豊	改良した四重極質量分析計による北日本白亜紀火山岩の $^{40}\text{Ar}/^{39}\text{Ar}$ 年代測定
論文博士	末広 牧子	質量分析法を用いた呼気 $^{13}\text{CO}_2$ の分析とその医化学・薬学への応用
同	岩田 鍊	無機窒素化合物系における高エネルギー $^{11}\text{C}$ の化学的挙動とその $^{11}\text{C}$ 標識化合物合成への利用に関する研究
同	野原 朝秀	沖縄島の新生代貝形虫

〔昭和59年3月19日付（13名）〕

物理学	辛 埴	シンクロトン放射光を用いた遷移金属化合物の研究
化学	板東 高志	環式イミンと環外共役二重結合を有するその誘導体
論文博士	長谷川 薫	成熟ラット肝細胞の in vivo 及び in vitro における増殖誘起の調節
同	水田 敏夫	閃亜鉛鉱中の亜鉛及び鉄の相互拡散速度及びその地質学的応用
同	猪原 節之介	マウス形質細胞腫より単離されるクラス II RNA ポリメラーゼによる転写の研究
同	松山 優治	内浦湾の内部潮汐
同	江川 千佳司	電子分光法による不均一触媒作用の研究
同	大塚 謙一	相模トラフ北端域および駿河トラフ北端域の上部第四系の地質構造
同	辻 尚志	同位体標識を利用した $^{13}\text{C}$ -NMR による Streptomyces Subtilisin Inhibitor の構造研究
同	松島 義章	日本列島における後氷期の浅海性貝類群集 — 特に環境変遷に伴うその時間的・空間的変遷 —
同	今城 忍	コリシン E 3 レセプターに関する研究
同	田吹 亮一	本州北部、津軽盆地の鮮新世—更新世貝形虫

〔昭和59年3月29日付（73名）〕

数	学	佐藤 篤之	3次元多様体の全葉層に昇格しない余次元1横断葉層対
	同	菅野 孝史	SO(2, q)上の正則尖点形式に付随するDirichlet級数について
	同	高崎 金久	自己双対Yang-Mills方程式に対する新しいアプローチ
	同	中島 匠一	代数多様体のコホモロジー群のガロア加群としての構造
物	理 学	前田 博信	対数的Fano 3様体の分類
	同	森田 悦郎	b, c, c. <sup>3</sup> Heの塑性変形
	同	八木 康之	四重極磁場中におけるプラズマ電流シートの研究
	同	阿久津 泰弘	生体膜相転移の理論的研究
	同	阿部 隆幸	d次元シェルピンスキー・ガスケット上の統計力学
	同	家 富 洋	高密度プラズマ中の多体相関-HNC近似の改良
	同	猿 渡 茂	クロマトグラフィーによる生体高分子間相互作用の研究
	同	落 合 勲	CO <sub>2</sub> レーザー散乱法によるトカマクTNT-A中のプラズマ密度揺動の研究
	同	葛 西 淳一	アルカリハライド結晶中のポジトロニウム
	同	梶 野 敏貴	A=7原子核系のクラスター構造および <sup>4</sup> He( <sup>3</sup> A, r) <sup>7</sup> A'反応
	同	金子 邦彦	非線形非平衡系におけるトラスの崩壊とカオスの発生
	同	黒 部 篤	不規則系の輸送現象とその周辺
	同	後 藤 典夫	メスバウアー測定によるFe <sub>3</sub> O <sub>4</sub> 低温相電子構造の解析
	同	清 水 明	乱雑系のハバードモデル
	同	中 山 隆一	格子上的超対称性
	同	平 本 尚	ポーラロン間相互作用とバイポーラロン状態
	同	古 川 昭雄	IT-TaS <sub>2-x</sub> Sexの極低温におけるアンダーソン局在
	同	古 林 孝夫	アモルファスSi-Au系における金属-非金属転移と超伝導
	同	本 宮 佳典	分子線レーザー分光法による分子衝突過程の研究
	同	満 田 和久	小質量連星X線源からのX線放射

専門課程	氏 名	論 文 題 目
物 理 学	米 田 茂 隆	核酸塩基複合体と蛋白アミノ酸間のインデュースド・フィッティング
同	Davalos. O. Luis. Antonio	非常に低い熱伝導度の壁に挟まれ回転している流体の磁気対流
同	和 氣 泉	X線パーセントのスペクトル
同	綿 村 哲	付加次元の自発的コンパクト化と統一ゲージ理論
天 文 学	新 田 就 亮	X線連続スペクトルによる太陽フレアの研究
同	花 輪 知 幸	中性子星のシェルフラッシュに対する熱的応答
同	柳 桂 和	共生型星白鳥座CH星の分光学的研究
同	李 宇 珉	星の非断熱非動径振動
地 球 物 理 学	当 舎 利 行	東北日本の岩石を用いた古地磁気学的研究
同	輪 座 利 彦	岩石と水の低速度衝突実験およびその微惑星の集積過程への応用
同	日 置 幸 介	中部アンデスの折れ曲りに関する古地磁気学的研究
同	松 本 剛	重力とリソスフェアの構造とその変形に関する研究
同	山 本 達 人	脈動型オーロラの時間空間特性とその物理機構
化 学	安 宅 彰 隆	ペプチドおよびタンパク質の振動分光学的研究
同	岩 澤 伸 治	スズ(II)=トリフルオロメタンスルホナートを用いる新しいアルドール型反応の開発
同	植 松 真 司	高励起ドリベルグ原子と分子との衝突によるイオン化過程の研究
同	太 田 真 哉	Baccharane 誘導体の骨格転位反応
同	折 田 秀 夫	ロジウム触媒上の一酸化炭素の水素化反応の機構の研究
同	加 藤 禮 三	BEDT-TTF 誘導体または1,2-di thiolene錯体を含む分子性導体の研究
同	端 山 俊	有機セレン化合物を用いた共役ニトロアルケンの立体特異的合成およびその応用
同	福 田 芳 男	CN( $B^2\Sigma^+-X^2\Sigma^+$ )発光スペクトルを用いた希ガス準安定原子によるシアン化物の解離励起過程の研究
同	村 上 正 浩	糖質化学における新しい合成手段の開発研究
同	山 田 太 郎	VII族金属表面上の一酸化炭素の吸着脱離と表面反応
同	吉 田 一 男	ICP発光法を液体クロマトグラフ用元素選択性検出器に用いる微量化学種同定分析
生 物 化 学	小 俣 達 男	ラン藻の細胞質膜とチラコイド膜の単離と生化学的性質の研究
同	伊 藤 直 人	酵母mRNA キャップ構造合成酵素の精製とその性質
同	石 黒 幸 一	棘皮動物精子鞭毛の運動調節機構に関する生化学的研究



専門課程	氏名	論文題目
生物化学	島村 道夫	サケ ( <i>Oncorhynchus Keta</i> ) 未受精卵ポリシアロ糖タンパク質の構造に関する研究
同	長谷 あきら	単クローン性抗体によるフィトクロームの免疫化学的研究
同	松崎 文雄	赤血球細胞骨格の構築単位
同	柳田 豊	好熱菌 P S 3 のチトクローム酸化酵素による水素イオンの輸送
動物学	岡 敦子	鶏胚十二指腸間充織の誘導作用による胃内胚葉の腸上皮への分化
同	岩本 裕之	斜紋筋の収縮機構
同	大石 昇	棘皮動物卵 DNA 合成に関する酵母の研究……DNA ポリメラーゼ及び DNA リガーゼ
同	小山 純正	金魚性行動の神経行動学的研究
同	藤田 一郎	コイの嗅覚中枢に関する電気生理学的研究
植物学	茂木 立志	大腸菌 K-12 株におけるプロリン輸送の分子機構
同	三村 徹郎	ホシツリモ ( <i>Nitellopsis obtusa</i> ) 原形質膜に存在する起電性イオンポンプの制御機構に関する研究
地質学	川幡 穂高	ガラパゴス海嶺コスタリカ海膨海底下の岩石にみられる熱水変質
同	山口 尚志	武尊・赤城火山におけるマグマの結晶作用における H <sub>2</sub> O の役割, 及び東北日本第四紀火山岩にもつその意味
同	田中 武男	日本海南西部における後期更新世以降の堆積物と堆積作用
同	Haruna, Mappa	相模湾の海底堆積物の堆積学的研究
同	柳井 修一	白亜紀四万十地向斜の古地理, 特に島弧前縁の地質構造形成史
鉱物学	土屋 憲彦	アウインの超構造の研究
相関理化学	梶山 瞳	電子顕微鏡法を用いたアクチン・トロポミオシン・ヘビメロミオシン複合体の構造と三次元像再構成の研究
同	出浦 一夫	欠陥面での臨界現象の展開理論
同	川原 正人	高密度励起状態 Ag Cl <sub>x</sub> Br <sub>1-x</sub> 混晶の高速時間分解発光
同	鈴木 芳生	干渉性放射光による原子分子の内殻光電離過程の研究
同	杉原 英光	ウシ肝臓カルシウム依存性中性プロテアーゼの生化学的研究

## 理学部長と理職との交渉

学部長と理職との定例交渉は、2月20日(月)及び3月27日(火)に理学部会議室で行われた。主な内容は、以下のとおりである。

### 1. 昭和60年定年退職後の欠員の補充について

去る1月25日の閣議決定で「昭和60年3月退職者の後補充は、真に必要な場合を除き行わないこと」とされたことについて、理職は、この決定は大学の実状を無視した不当なものであり、全員補充のための行動をおこすよう学部長に要請した。学部長は、「欠員が補充されないと理学部は大変困る。東大は特に退職者が多く欠員補充について大学としても相当な努力をする必要がある。」と述べた。

### 2. 職員の待遇改善について

①理学部長より、4月1日付で若干名の昇任を含む待遇改善がなされるだろうという報告があった。理職からは、今後とも更に待遇改善のために努力されるよう要請があった。

②教務職員の「教育職俸給表から専門技術職俸給表」への移行の可能性を検討している旨、学部長より発言があった。

### 3. 公務員の賃金問題について

理職から、理学部職員の生活実態調査(2月実施)による賃上げの要求額が月4万2千円程度であるとの説明があり、学部長の感想を求められた。学部長は「生活が苦しくなっていることは理解できる。今年こそ人勧が完全実施されるよう望んでいる。総長にも上申する。」と述べた。

### 4. 若手研究者問題について

総長補佐会より出された「東京大学における若手研究者の問題」という文書について、学部長は「『この文書が中間報告であること』及び『理学部の記述に一部誤りがあること』を添書すれば大いに議論してもらって結構である。」と述べた。理職は、「この問題は非常に重要なので、広く構成員の意見を聞くべきである。」とし、これに対し理学部長も「自由な討論を希望している。」と表明した。

### 4. その他

職員の身分証明書については、「希望者には写真が貼付できるよう検討中である。」ことを伝えた。

## 注 意

### 1. 盗難防止について

理学部の各号館で、盗難による被害が後を絶ちません。現金はなるべく置かないように、また、貴重品の扱いにも留意して下さい。

### 2. 火災防止について

学内での火災事故がありました。火の元に十分気をつけて下さい。

### 3. 健康・安全管理について

教職員・学生の健康・安全管理について理学部としての対策を検討しています。各人も工夫して自己の健康・安全管理に努めて下さい。

### 4. 軍事研究について

東京大学においては、『軍事研究は行わない。』『基本姿勢として軍との協力関係を持たないこと。』が慣行となっていることに留意して下さい。

# 海外渡航者

(3 月)

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	助教授	折戸周治	ドイツ連邦共和国	3. 3~3. 24	e <sup>+</sup> e <sup>-</sup> 相互衝突装置「PETRA」及びe <sup>+</sup> e <sup>-</sup> 測定装置「JADE」による万能型測定装置及び測定のためのソフトウェアの調査・研究のため
中間子	助手	今里純	スイス	3. 4~4. 19	SINにおけるミュオン実験のため
鉱物	助教授	武田弘	アメリカ合衆国	3. 10~3. 18	第15回月・惑星科学会議出席のため
物理	教授	有馬朗人	ブラジル	3. 2~3. 19	原子核理論に関する研究打ち合せのため
物理	技官	田中万博	スイス, 西独, フランス	3. 6~4. 23	国際共同研究「高エネルギー原子核反応と原子核のクォーク構成的構造」の研究実施のため
地物	助手	松井孝典	アメリカ合衆国	3. 9~3. 28	第15回月・惑星科学会議出席及び地球及び惑星内部物理学に関する研究打ち合せのため
情報	助手	石畑清	アメリカ合衆国	3. 23~3. 31	ワシントンAda(応用に関する諸問題)シンポジウム及びソフトウェア工学国際会議出席のため
化学	教授	田丸謙二	中華人民共和国	3. 5~3. 15	触媒化学に関する研究指導及び打ち合せのため
物理	助手	千葉順成	スイス, 西独, フランス	3. 8~3. 25	高エネルギー原子核反応の国際共同研究のため
地質	教授	久城育夫	アメリカ合衆国	3. 12~4. 14	岩石学の研究のため
地物	助手	中村一	中華人民共和国	3. 19~3. 26	「チベット高原と山岳気象」に関する国際会議に出席のため
地物	助手	新田勅	中華人民共和国	3. 19~3. 26	「チベット高原と山岳気象」に関する国際会議に出席のため
植物園	教授	岩槻邦男	インドネシア	3. 22~3. 31	インドネシアにおける沿岸地域の生物学的調査のため
地物	教授	佐藤良輔	連合王国	3. 24~3. 29	国際地震学・地球内部物理学に関する研究打ち合せのため
地物研	教授	福島直	中華人民共和国	3. 26~4. 8	地球磁気学に関する研究打ち合せのため
物理	助教授	中井浩二	スイス	3. 18~3. 25	ハイパー核の研究のため
地物	助手	鈴木保典	中華人民共和国	3. 26~4. 1	地震工学国際研究集会に出席のため
動物	教授	水野丈夫	インドネシア	3. 30~4. 12	ニワトリ胚における始原生殖細胞の起源研究のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
数学	教授	伊原康隆	アメリカ合衆国	3. 22~6. 25	整数論とその関連分野の研究調査のため
物理	助教授	永宮正治	アメリカ合衆国	3. 24~4. 1	日米共同研究及び原子核実験に関する研究打ち合せのため
化学	教授	不破敬一郎	シンガポール 中華人民共和国	3. 25~4. 14	環境科学の研究交流のため
物理	教授	清水忠雄	シンガポール	3. 26~3. 31	理学(薬学を含む)分野における日本とシンガポールとの学術交流のため

( 4 月 )

物理	教授	山崎敏光	ドイツ連邦共和国	4. 1~9.30	物理実験学に関する調査・研究のため
物理	教授	和田昭允	イタリア	4. 21~4. 29	核酸・蛋白質および膜の構造と動力学国際シンポジウム出席のため
物理	教授	小柴昌俊	アメリカ合衆国	4. 10~4. 27	第五回大統一理論ワークショップ及びアメリカ物理学会に出席のため
数学	助教授	大島利雄	フランス アメリカ合衆国	4. 1~8. 16	対称空間上の解析学の研究およびハリシュ・チャンドラ追悼記念シンポジウムに出席のため
天文	助手	桜井隆	ドイツ連邦共和国	4. 7~ S 60. 4. 10	太陽大気内の磁気流体现象に関する研究のため
物理	教授	西島和彦	台湾	4. 8~4. 28	素粒子論に関する研究打ち合せのため
地殻	助教授	脇田宏	アメリカ合衆国	4. 16~5. 7	白鳳丸における研究乗船のため
地殻	助手	中村裕二	アメリカ合衆国	4. 16~5. 13	白鳳丸研究航海及びグローマーチャレンジャー(Leg 95)航海会議出席のため
化学	助手	正田晋一郎	スイス	4. 1~ 60. 3. 31	有機合成化学に関する研究のため
化学	助教授	奈良坂紘一	フランス, スイス ドイツ連邦共和国	4. 23~5. 6	「不斉合成欧州化学会議」出席及び有機合成化学に関する研究打ち合せのため
人類	助手	徳永勝士	オーストリア ドイツ連邦共和国	4. 26~6. 4	ヒト補体系成分変異型の比較調査のため
物理	教授	上村洸	イタリア, スイス 連合王国	4. 24~7. 1	固体物理学に関する研究打ち合せのため
化学	助手	小橋浅哉	アメリカ合衆国	4. 24 ~ S 60. 4. 30	放射化学に関する研究のため
数学	助手	楠岡成雄	ドイツ連邦共和国	4. 26~9. 13	研究プロジェクト「無限自由度の物理学と数学に参加するため
素粒子	助手	武田広	スイス	4. 15~10. 15	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
素粒子	助手	小林 富雄	スウェーデン	4.20～5.9	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
物理	助手	相原 博昭	アメリカ合衆国	4.20～6.20	日米科学技術協力事業の一環として「電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験」に参加するため

## 東京大学職員の永年勤続者表彰

昭和59年4月1日付で退職される職員に対する総長表彰状が3月30日（金）正午、学部長室において、江上学部長から伝達された。

（事務部） 浅 沼 良 子

（植 物） 齋 藤 清太郎

（植物園） 加 藤 中 ツ

（ ” ） 芳 賀 甚 吉

昭和59年4月12日（木）午後3時から、神田学生会館において、永年勤続者（本学勤続20年）表彰式があり、本学部勤務者のうち次の11名の方が表彰を受けた。

（事 務）中島 一雄 （数 学）佐川千枝子

（情 報）吉野 敏夫 （物 理）土肥 絢子

（物 理）植木 昭勝 （化 学）三津橋 務

（化 学）関 俊子 （ ” ）平尾 宣子

（ ” ）長谷川エイ子 （生 化）野口 道子

（地物研）田川 俊一

### ◎泥棒がねらっている（盗難注意）！

本郷構内は泥棒天国といわれています。いたるところで泥棒（盗難）の被害にあっています。あなたのちょっとした注意で被害をくいとめられます。

～最近被害続出～

# 人 事 異 動 報 告

(講師以上)

所属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
化 学	助 教 授	中 村 暢 男	59. 3. 16	昇 任	助手から
植 物	助 教 授	駒 嶺 穆	59. 4. 1	〃	東北大理教授へ
数 学	助 教 授	岡 部 靖 憲	〃	〃	北大理教授へ
物 理	教 授	鈴 木 秀 次	59. 4. 2	停年退官	
化 学	教 授	田 丸 謙 二	〃	〃	東京理科大教授へ
地 物	教 授	岸 保 勘 三 郎	〃	〃	
地 質	教 授	花 井 哲 郎	〃	〃	
鉱 物	教 授	竹 内 慶 夫	〃	〃	
地 物	教 授	松 野 太 郎	59. 4. 1	昇 任	助教授から
植物園	助 教 授	加 藤 雅 啓	〃	〃	講師から
植 物	助 教 授	笠 原 道 弘	〃	〃	〃
〃	講 師	新 免 輝 男	〃	〃	助手から
数 学	講 師	楠 岡 成 雄	〃	〃	〃
物 理	助 教 授	神 部 勉	〃	配 置 換	九大工から
化 学	助 教 授	岩 沢 康 裕	〃	〃	横国大工から
動 物	教 学 部 授 長	江 上 信 雄	〃	併 任	理学部長・評議員 60. 3. 31 まで
地 質	教 授	飯 山 敏 道	〃	〃	評議員 61. 3. 31 まで
物 理	教 授	山 崎 敏 光	〃	〃	附属中間子科学実験施設長 61. 3. 31 まで
〃	教 授	小 柴 昌 俊	59. 4. 11	〃	附属素粒子物理国際センタ ー長 61. 3. 31 まで
〃	教 授	田 中 靖 郎	59. 4. 1	〃	本務：宇宙科学研教授 60. 3. 31 まで
〃	教 授	高 柳 和 夫	〃	〃	〃
〃	教 授	西 村 純	〃	〃	〃
〃	教 授	清 水 幹 夫	〃	〃	〃
地 物	教 授	伊 藤 富 造	〃	〃	〃
〃	教 授	大 林 辰 蔵	〃	〃	〃
〃	教 授	西 田 篤 弘	〃	〃	〃
物 理	助 教 授	河 島 信 樹	〃	〃	本務：宇宙科学研助教授 60. 3. 31 まで
〃	助 教 授	小 川 原 嘉 明	〃	〃	〃

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
物理	助教授	松岡 勝	59. 4. 1	併任	本務：宇宙科学研助教授 60. 3. 31まで
地物	助教授	中村 良治	〃	〃	〃

(助手)

地質	助手	藤井 敏嗣	59. 3. 1	昇任	地震研助教授へ
動物	助手	井内 一郎	59. 3. 31	辞職	上智大講師就任
物理	助手	内海 研一	〃	〃	富士通へ
化学	助手	松本 和子	〃	〃	早大助教授就任
数学	助手	橋本 喜一郎	〃	〃	〃 講師 〃
〃	助手	山崎 昌男	59. 4. 1	採用	
植物	助手	三村 徹郎	〃	〃	
数学	助手	中島 匠一	〃	〃	
化学	助手	岩澤 伸治	〃	〃	
物理	助手	家富 洋	〃	〃	
〃	助手	相原 博昭	〃	〃	
化学	助手	梅沢 喜夫	59. 4. 1	昇任	北大理助教授へ
数学	助手	真島 秀行	〃	〃	一橋大講師へ
物理	助手	上田 芳文	〃	〃	高知医大教授へ
〃	助手	松瀬 丈浩	〃	〃	信州大助教授へ
〃	助手	清水 韶光	〃	〃	高エネ研助教授へ
〃	助手	中村 健蔵	〃	〃	〃
中間子	助手	松崎 禎市郎	〃	〃	文部技官(教務職員)から
〃	助手	久野 良孝	〃	〃	〃
化学	助手	渡部 徳子	59. 4. 11	辞職	4. 12付放送大学学園 助教授就任

(素粒子関係)

物理	助教授	山田 作衛	59. 4. 1	配置換	附属素粒子物理学国際協力 施設時限到来により廃止の ため
〃	助教授	戸塚 洋二	〃	〃	〃
〃	助手	井森 正敏	〃	〃	〃
〃	助手	武田 廣	〃	〃	〃
〃	助手	蓑輪 真	〃	〃	〃
〃	助手	小林 富雄	〃	〃	〃
〃	助手	川本 辰男	〃	〃	〃
〃	助手	佐藤 朝男	〃	〃	〃
〃	助手	竹下 徹	〃	〃	〃

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
附属素粒子物理国際センター	助教授	山田作衛	59. 4. 11	配置換	附属素粒子物理国際センター 59. 4. 11 付新設のため
"	助教授	戸塚洋二	"	"	"
"	助手	井森正敏	"	"	"
"	助手	武田廣	"	"	"
"	助手	蓑輪真	"	"	"
"	助手	小林富雄	"	"	"
"	助手	川本辰男	"	"	"
"	助手	佐藤朝男	"	"	"
"	助手	竹下徹	"	"	"

(職員)

臨海天文化学物理	技官	関藤守	59. 3. 16	採用	
	技官	桜井敬子	59. 3. 31	辞職	
	事務官	宮内郁子	59. 3. 31	"	
	技官	橋口房枝	59. 3. 1	採用	
"	"	"	59. 3. 5	辞職	
事務	庶務掛主任	浅沼良子	59. 4. 1	"	
植物園	用務員	齋藤清太郎	"	"	
	事務官	加藤キツ	"	"	
"	技官	芳賀甚吉	"	"	
事務	庶務主任 人事掛長 (併)	蓮見公一	"	配置換	物性研究所から
"	司計掛主任	永野謙一	"	"	工学部原子力工学研究施設 から
中間子	事務室主任	塩見イソ子	"	"	物理学科から
数学	事務室主任	菊池博子	"	昇任	化学科から
物理	事務室主任	菅原貴子	"	"	
生化	事務室主任	宮崎節子	"	"	化学科から
事務	事務官	小宮昌信	"	配置換	経済学部から
化学	事務官	長谷川エイ子	"	"	生物化学科から
"	事務官	林理恵子	"	"	数学科から
物理	技官	佐伯喜美子	"	採用	
地質	教務職員	米田幸子	"	"	
物理	技官	福地光一	"	配置換	中間子科学実験施設から
事務	司計掛主任	片岡最	"	昇任	原子核研究所用度掛長へ
"	人事掛主任	山口泰教	"	配置換	海洋研究所総務課庶務掛主任へ



所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
事務	事務官	長本安弘	59. 4. 16	昇任	天文台野辺山宇宙電波観測所事務室主任へ
"	事務官	河野広幸	"	採用	

## 外国人客員研究員報告

所属	受入れ 教官	国籍	氏名	現職	研究員期間	備考
人類	埴原教授	中国	王令紅	中国科学院古脊椎動物与古人類研究所 研究員	58. 10. 1 } 59. 9. 30	
数学	小松教授	ベルギー	Jean-Louis LIEUTENANT	ベルギー国立科学研究財団研究員	59. 1. 1 } 59. 12. 31	
数学	藤田教授	中国人民 共和国	谷超豪	復旦大学副部長	59. 4. 1 } 59. 5. 15	日本学術振興会 外国人招へい研究 者
数学	田村教授	アメリカ 合衆国	Wu - Chung Hsiang	プリントン大学 教授	59. 6. 15 } 59. 7. 20	日本学術振興会 外国人招へい研究 者
情報	後藤教授	シンガポ ール	盧家福	*NUS, 理学部 計算機科学科助手	59. 4. 1 } 60. 3. 31	* (NUS…シン ガポール国立大学)
数学	塩田助教授	デンマー ク	Nygaard Niels	シカゴ大学 準教授	59. 6. 15 } 59. 7. 15	
数学	小松教授	日本	加藤敏夫	カルフォルニア大学 特別教授	59. 4. 5 } 59. 7. 5	日本学術振興会 外国人招へい研究 者
数学	塩田助教授	U S A	Walter L. Baily	シカゴ大学教授	59. 6. 15 } 59. 9. 15	
人類	西田助教授	タンザニ ア	Hosea Y. Kayumbo	ダレスサラーム大学 教授 (国立科学調査 庁長官)	59. 5. 1 } 59. 6. 30	日本学術振興会 外国人招へい研究 者
地物研	福島教授	フランス	Michel Teboul	CNRS研究員	59. 9. 1 } 60. 3. 31	
化学	岩沢助教授	中華人民 共和国	翟潤生	大連化学物理研究所 研究員	58. 10 } 59. 9	

## 所 感

大学を取り巻く内外の情勢が厳しい昨今です。予算や人員の面でも合理化が必要であり、特に昭和60年度からの公務員定年制は、理学部にとって大きな試練となると覚悟が必要です。このような時

期に学部長に再任された責任の重大さを痛感しています。困難はあっても、理学部の皆様の探究心と創造性だけは失われたいようにしたいと願っております。

理学部長 江 上 信 雄

### 編 集 後 記

編集担当は1号館にまわってきました。日頃疎遠になりがちな教室間の情報交換や交流の場として、この広報をご利用いただければと思います。それぞれの号館に編集委員がいますので、ご意見や情報をお寄せ下さい。皆様のご協力で面白い読み物にしたいと思います。(矢 崎)

---

#### 編集：

松 野 太 郎 (地物)	内線	4 2 9 9
佐佐木 行 美 (化学)		4 3 5 9
田賀井 篤 平 (鉱物)		4 5 4 4
尾 本 恵 市 (人類)		4 4 8 2
矢 崎 紘 一 (物理)		4 1 2 3

---